

「日本一」を生み出した、  
大陸での記憶と経験



## こしろ/こじょう 古城



### 盛り上がった地区対抗の相撲大会

十川の街から長沢川沿いに北上。戸川橋バス停を通過して200mほどで古城地区に入る。古城も戸川や白井川などと同じで縦に長く、その北端は伊予・日吉と接しているため、古くから伊予との交流が深かった。県境にある地蔵を古城、隣の地吉、日吉村犬飼地区の3地区で祀ってきた歴史がある。祭りの日の相撲大会は地区対抗となり、大いに盛り上がったという。下組・長沢・本村・山瀬・追和の五つの組<sup>からず</sup>で構成される古城は、十和村発足(昭和32年)までは「烏」といった。産土神は八幡大神宮である。

### 古城椎茸研究会

中世は茶と楮が主たる産物で、明治以降は炭焼きが中心であった。細々とはあるが養蚕も行われていたが、昭和4年に始まった世界恐慌によって生糸価格が暴落。国内の養蚕は壊滅的になる。代替産業が乏しく田畑の少ない古城は、満州開拓団政策の対象になってしまうのだが、これが後の十和村の基幹産業創出の原動力になる。

終戦とともに満州開拓団から帰国した人や、復員してきた人たちなど18名が、昭和30年頃に「古城椎茸研究会」を立ち上げ、椎茸栽培および乾燥椎茸の生産に挑戦し始めた。彼らは当時の先進地に何度も足を運び、栽培技術・乾燥方法の研究を重ねた。そして試行錯誤の末、独自の技術にたどり着く。「オンドル式(古城式)乾燥法」である。これは中国大陸での記憶や経験から生まれた技術であった。十川村(のち十和村)・古

城地区で始まった椎茸プロジェクトは全村に拡大し、昭和51年・53年に生産高日本一となる。

### 最後まで粘った養蚕

同じく全村的プロジェクトだったのが、昭和53年に1億円産業に発展した養蚕である。昭和30年代後半から本格化した養蚕事業は、ここ古城でも取り組む人は多かった。その昔に経験のある養蚕。地区にはクワ畑が増え「どの家にもお蚕様の部屋があった。人間のメシよりお蚕様のメシが先じゃったし、お蚕様に寝る場所も追われた」。子どもたちもクワ摘みを手伝った。指輪に刃がついたような「クワ摘み」と呼ばれる道具で摘むのだが、子どもはうまく使えず親指をよく切ってしまったそうだ。「夏はクワ摘み。冬は椎茸のほだ木運びと、子どもの手伝いも重労働じゃった」。

国内の養蚕が下火になると同時に十和村でも消滅していったが、最後まで粘ったのは、大井川とここ古城だったという。



地区の方が保存されていた「クワ摘み」

#### 町のうごき

(11月30日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,217		-14	男 1	15	8	8
女	7,761		-6	女 2	10	10	8
計	14,978		-20	計 3	25	18	16
世帯数	7,960		-11	(11月中の届出)			

窪川地域 10,680人 大正地域 2,047人 十和地域 2,251人